

映る

砂が走る
砂丘の上を

かすかな煙が這っていくかのように

風が強く吹く
見渡す限り、砂の煙が走る

水平線の向こう
太陽の光が
斜線となって何十も走る

砂と空の間にあるのは
冬の海

砂が走る音が聞こえる
かすかに
かすかに
浜は大きく弧を描く
白く波立つ海の向こうに
遠くの浜が見える
家と木々

うす蒼いシルエットで

そこに、雲の隙間からの光線が差す

コンビニの前に、田

畦に枯れた葦が短く残っている

風が吹く

小さなさざなみ

ちりめんのような

風が止むと、田んぼの水面に

風景が現れる

青いトタンの屋根

細い木

空

目を上げれば

ああ

実在する青いトタンの屋根

細い木

こういうタッチの油絵を知っている。

いや、こういう水たまりにうつるものを知っているから、あの油絵を思い出すのだ。

水たまりに映るものに、心惹かれる。

実在の風景よりも。
そういう癖がある。

若いころ、小説を書いていた。

将来は、小説家だと勝手に決め込んでいた。
なんのことはない。

仕事が辛いとき、自分には別の才能があるんだと、
慰めているにすぎなかった。

少しずつ気づいていたが、認めたくはなかった。

会社が終わると、ろくに付き合いもせず、部屋に
戻り、原稿用紙に文字を埋めていく毎日だった。

パソコンどころか、ワープロもない時代だ。

今の若い人には、明治時代と変わりがなくもし
れない。

樹木、という題の小説を書いたことがある。

誰にも見せたことがない。

その前に書いた小説を、知り合いを介して、高名
な文学者にみてもらった。

彼からは、何の感想もなかった。

その代わりと言っていいのかわからないが、ある詩人
からの感想が、風の便りに聞こえてきた。

酷評だった。

意志など、もろいものだど、その時に分かった。

一生の仕事、などと意気こんでいたのだが、その気持が急速に薄らいでいくのが、よくわかった。他人のひと言に影響されるくらいの意志なのか、と叱咤激励してみるのだが、うまくいかなかった。

そのころ、会社では、大切な仕事を、少しずつ任されてきていた。

一生懸命頑張れば、成果は表れた。

今度は、仕事を自分への言い訳にした。

才能はないんだ。

そんな時間があったら、仕事に直結する知識を増やそう。

会社の同僚と、もっと付き合おう。

そうやって、気がついてみたら、小説は読むものとなっていた。

樹木という小説で、私は、ガラスに映る、一本の木を追い求める男を描いた。

實在しない木だ。

夕刻、部屋が暗くなり、電気をつける。

ガラス窓に映る、一本の木。

本来なら、私が映るはずのガラス窓に。

なぜ、木が映るんだ、と

小説の中の男は、必死になる。

自分の分身の木を、探し回る。

なぜ、あの頃は、そのことがそんなに不思議だったの
だろう。

ガラスに映る自分の姿が、人間でなくて、木である
ことが。

そういうことは、あるんだよ。

あの頃の私に、教えてやりたい。

今の私は、木どころか、何も映っていないかもしれな
い。

それが、妙に心地よい。

水たまりに映る、空や屋根。

覗き込んでいる私が、映らなくてもいいではない
か。

若い店員が、やってきて、心配そうにのぞきこむ。

「大丈夫ですか。

気分が悪いんじゃないかと思って。」

コンビニの駐車場に、長居しすぎてしまった。

すまないな。

若者に心配させてしまった。

もちろん、言葉とは裏腹に、迷惑そのものといった
顔をしていたが。

それでいいんだよ。

一応、社会的な言葉を使えるだけ、えらい。

さあ、出発することにしよう。